リハビリテーション科学
東北文化学園大学　リハビリテーション学科　紀要
第20巻　第１号　2024年３月

【巻頭言】

「　AI　」

東北文化学園大学　医療福祉学部　リハビリテーション学科　理学療法学専攻

小林　武

以前の住まいの近所に、綺麗な首輪をつけたチョコちゃんというアイドル猫がいました。ある程度決まった時間に地域内を見廻るように闊歩するので、小学生の下校時間には公園で児童達と遊んでいたり、チョコちゃんの夜の見廻りと私の帰宅時間が合ったときには、しばし玄関先で日本語と猫語で会話を楽しんだりしていました。ところが、あまりの暑さで体調を崩したのか、外の散歩を禁止されたのかはわかりませんが、昨年の猛暑を境にパタッと姿が見えなくなりました。それからは家族の会話の中でもチョコちゃんの話題が多くなったり、いわゆる color bath effect なのか、道を歩いていても、ぼんやり外を眺めていても、車や電車の中からでも、猫の姿がよく目につくようになったりしました。

color bath effect あるいはそれに似た意味を持つ cocktail-party effect は、少し前まできわめて人間的・生物的な機能でした。それが現在では、画像認識 AI と音声認識 AI に代表されるいわゆる識別系 AI が人間を超えようとしています。精細性、正確性、即時性では追い抜かれているかもしれません。しかし、瞬間瞬間における情報の取捨選択のファジーさといった部分は、まだ人間の方が勝っているように思います。

世の中では生成 AI による様々な問題に対して注意喚起がなされています。本学でも学長から「ChatGPT 等の生成 AI 利用に関する留意事項」が提示されました。生成 AI の欠点とリスクをしっかりと把握したうえで適切に利用することが求められています。

生成 AI にいくつかキーワードを投入すると冗長性のない見事な文章を作るし、実験データをアップロードすればそれをまとめた結果の文章を返してくれます。ひいては公開されている関連性の高い研究論文や総説、ネット上の解説記事、図表等を生成 AI に入力してまとめさせれば、少し修正するだけで論文に使えそうな文章になります。そうなるともはや自分が作成した論文なのか AI が代理作成したのか区別ができなくなります。筆頭著者名が ChatGPT などという冗談さえも笑えなくなるかもしれません。

しかしながら、今の生成 AI は最初に材料となる情報を投入しなければまったく用を成しません。投入された情報を加工し、関連する情報を探し出し、確率論を頼りに当たり障りのない文章を組み立てることに特化されているので、新しい知見、考え方、法則などは生成してくれません。ですので、生成 AI が書き出す考察の文章はまとまっているわりには面白みに欠けるものになるでしょう。実験結果から新しい法則や解釈を創造できるのは、今のところ人間の思考だけなのです。「ファジーな感覚から得られた一見意味を持たないような情報が serendipity の琴線に触れ第六感を擽る」などはきわめて人間的かつ非 AI 的な表現ですが、そのようなひらめきがきっかけとなって科学や物作りが発展してきたのだと思います。小さな総合大学である本学で学ぶ学生たちも、専門にとらわれず幅広い分野を横断的に学び様々な教養を身につけることで、新たなひらめきを得るチャンスを広げることができるでしょう。

チョコちゃんとは昨年11月6日にようやく再会できました。嘘のような本当の話ですが、今の住まいへの引っ越しの日でした。私の顔を見上げて「元気にしてた？」と言ってくれたような気がしました。Alexa に猫の鳴き声を翻訳できるか尋ねたら MeowTalk を薦められました。MeowTalk は AI を搭載した世界 No.1の猫語翻訳アプリなのだそうです。QOL を高めてくれる AI は大歓迎です。

リハビリテーション学科紀要「リハビリテーション科学」第20巻がここに発刊されました。業務多忙の中、投稿いただいた方、査読・編集等にご尽力いただいた先生に感謝いたします。これからも多くの研究報告がなされ、未来の医療・教育の発展に寄与することを願います。